

1

宇宙世紀0087年11月16日。反地球連邦組織エウーゴとカラバは、アフリカ大陸の西端セネガルの首都ダカールにある地球連邦政府議會を占拠。そこで、エウーゴの代表となったクワトロ・バジーナは、自身がかつてジオン公国軍で「赤い彗星」シヤア・アズナブルと呼ばれていたこと、そしてジオン・ズム・ダイクンの遺児であるキャスバル・レム・ダイクンだということを表明し、ティターンズの暴虐の実態を全世界に告発した。後に「ダカール演説」と語り継がれるこの演説は、世論に大きな影響を与え、グリプス戦役は転換点を迎えることになった。

こうした状況を踏まえて、その後のグリプス戦役はエウーゴとティターンズはそれぞれ総力戦のごとく戦力を投入し、より奇烈な戦いが予想されていた。

エウーゴは、スポンサーであるアナハイム・エレクトロニクス社（以下、A E社）と共に戦力増強に向けた計画を発動する。A E社には、エウーゴと共に進められた次世代MSの開発計画「Zプロジェクト」を主幹としつつも、そこから派生する形でいくつかのMSの改良や発展を行う開発計画が同時多発的に存在していた。

さまざまなプロジェクトのMS群が開発される中で、最も多くの謎に包まれているのが、MSF・007ガンダムMk・Ⅲ。同名の機体はティターンズ側でも開発されていたが、それらの殆どは戦場に出ることなく表舞台から消えた。

ティターンズから鹵獲したガンダムMk・Ⅱを分解研究した結

果、この機体はモビルスーツの初期コンセプトでもある「強化宇宙服としての人型機動兵器」という原点に戻るといふコンセプトのもと造られたことが判明する。同時にガンダムMk・Ⅱは、地球連邦軍だけの偏った技術からくる構造上の複雑さと機体強度の低さを抱えていることも露呈することとなった。この原点回帰的なコンセプトに着目したフジタ技師長をチーフとするA Eの開発チームは、ガンダムMk・Ⅱに心酔し、新世代モビルスーツ案として発展型であるガンダムMk・Ⅲの開発に取り掛かったのである。

まずは高性能ながら、複雑な構造となっていたムーバブル・フレームを徹底検証し、機能性をそのままに構造を単純化する作業が行われた。その結果、脆弱さを解消する形で機体構造が見直され、機体強度の向上が図られることになる。さらに、関節部はより人体に近い有機的な動きを再現するため、かなりの改良が施されていた。

また、装甲やムーバブル・フレームにもガンダリウム合金を使用することで、軽量化と防弾性能が向上し、機動性を高めることに成功している。こうした改良の結果、ガンダムMk・Ⅲは当時の汎用MSの最新進化形とも言える完成度となっていた。

A E社では、ガンダムMk・Ⅲは数機が生産され、機体の特性を活かすためのいくつかの最終調整が行われた。その中の1機である8号機は、標準装備である実体弾兵器に対するシールド装備に加え、MSN・00100百式でも採用された耐ビーム・コーティングの廉価仕様を施した機体として完成。そのカラーリングは、鮮やかな「赤」で彩られていた。エウーゴにおける「赤」のカラーリングは、クワトロ・バジーナが自身の愛機であるリック・ディアスに

塗装したことから始まる。その後、機体イメージを向上させるインパクトがあつたため、リック・ディアスの正規カラーにも採用されており、エウーゴではメジャーなカラーリングではあつた。その一方で、ガンダムMk・Ⅲが「赤」で塗装されたことは、クワトロ・バジーナの新たな機体にしたかったという意向があつたとも言われている。

月面都市グラナダから秘密裏に運び出されたガンダムMk・Ⅲ8号機は、エウーゴのコリアー艦隊が待つサイド2宙域に向かい、ボイド小隊が護衛する小型輸送船にて移送されることとなった。

最新鋭機の輸送は、ティターンズの監視する宙域を避けるべく、旧サイド6である魔の空域に近い場所を移動するルートがとられることとなった。

かつては、ジオン残党軍の最大勢力だったデラズ・フリートが隠れていたとされる魔の空域は、障害物が多いために移動ルートとしては避けられる傾向にあつたが、この秘密裏な新兵器の輸送にとつては絶好のルートであつたとも言える。

しかし、そんな安全なはずのルートに落とし穴があつた。移動ルート上に所屬不明機が存在するアラートがボイド隊のMSのコクピットや小型輸送船の艦内で鳴り響く。

そこにはこの時代、ジオン残党軍で最大勢力を誇るアクシズの二個小隊6機で編成された強行偵察部隊の姿があつた。彼らの目的は、全滅したデラズ・フリートが残したとされる次の圏の搜索。彼らもまた密命を受けて任務を行っていたのだ。

つづく

Illustration / MORUGA

ANAHEIM
LABORATORY LOG

©創造・サンライズ

ANAHEIM LABORATORY LOG

アナハイム・ラボラトリー・ログ

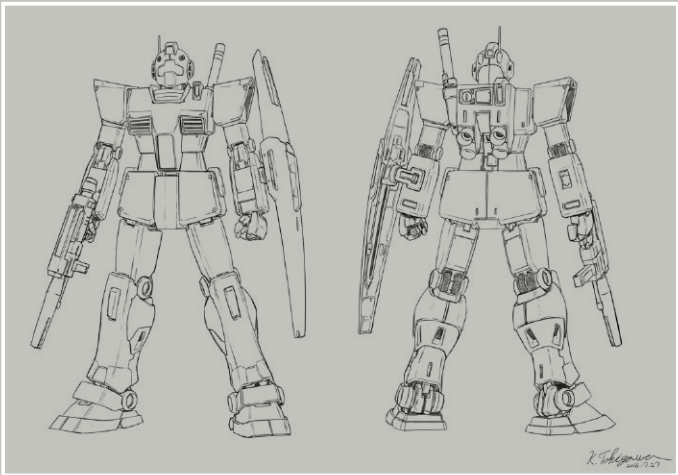
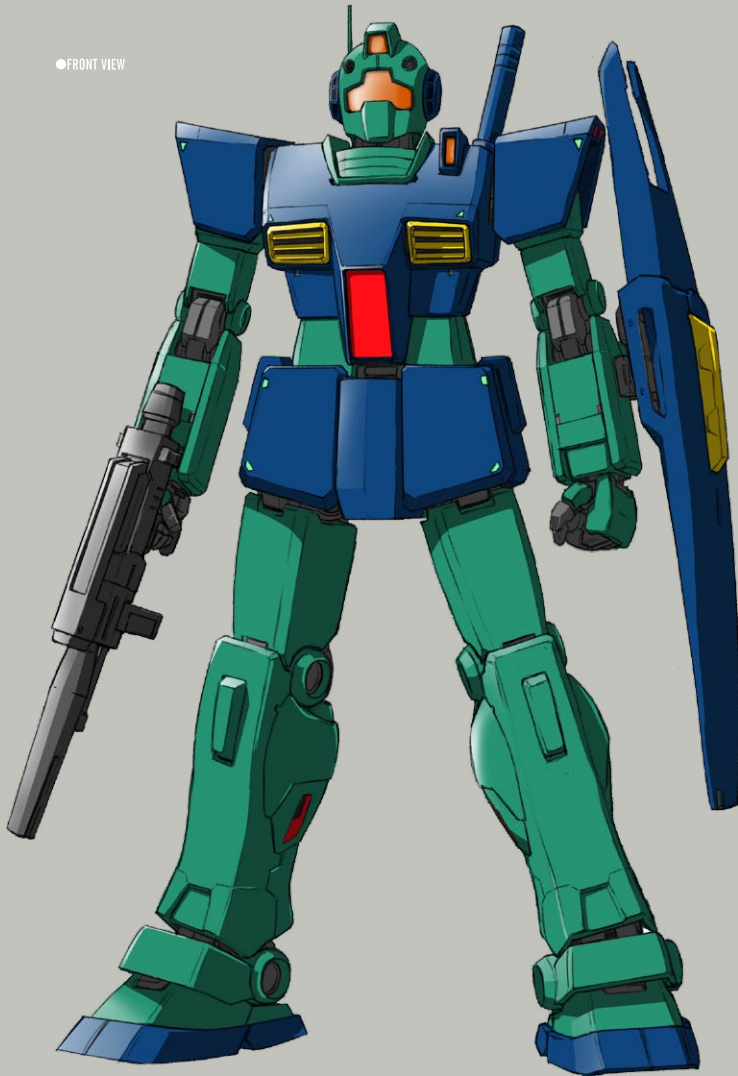
[第1話：消えた赤い機体①]

アナハイム・ラボラトリー・ログ [第1話：消えた赤い機体①]
MSF-007 GUNDAM Mk-III / RGM-79R GMII / RGM-79N GM CUSTOM

001

002

●FRONT VIEW



●REAR VIEW

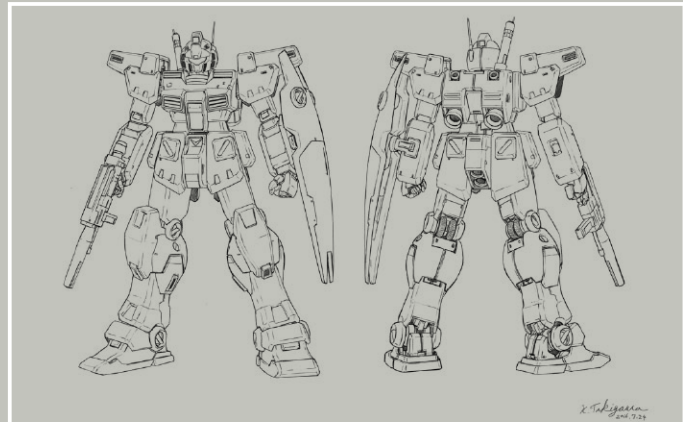
A.E.U.G.

RGM-79R GM II

[ジムII]

◀グリプス抗争時にエウゴ、ティターンズを問わずに運用されたRGM-79ジムの近代改修機。リニアシートの採用に合わせたコクピットの換装、スラスターやセンサーを増設することによって、機体性能の向上を図っている。エウゴでは、所属識別として胸部をグリーンに塗装した機体を使用していたが、一部のパイロットは新型機のネモにあやかって同じカラーリングを採用。シールドもネモで正式採用されたモデルを装備していた。

[DATA] ●頭頂高／18.1m ●本体重量／40.5t ●全備重量／58.7t ●ジェネレーター出力／1,518kw ●スラスター総推力／62,000kg ●センサー有効半径／8,800m ●装甲材質／チタン合金セラミック複合材 ●武装／バルカン砲×2、ビーム・ライフル、ビーム・サーベル



[DATA] ●頭頂高／18.0m ●本体重量／42.0t ●全備重量／57.6t ●ジェネレーター出力／1,420kw ●スラスター総推力／67,480kg ●装甲材質／チタン合金セラミック複合材 ●武装／バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル

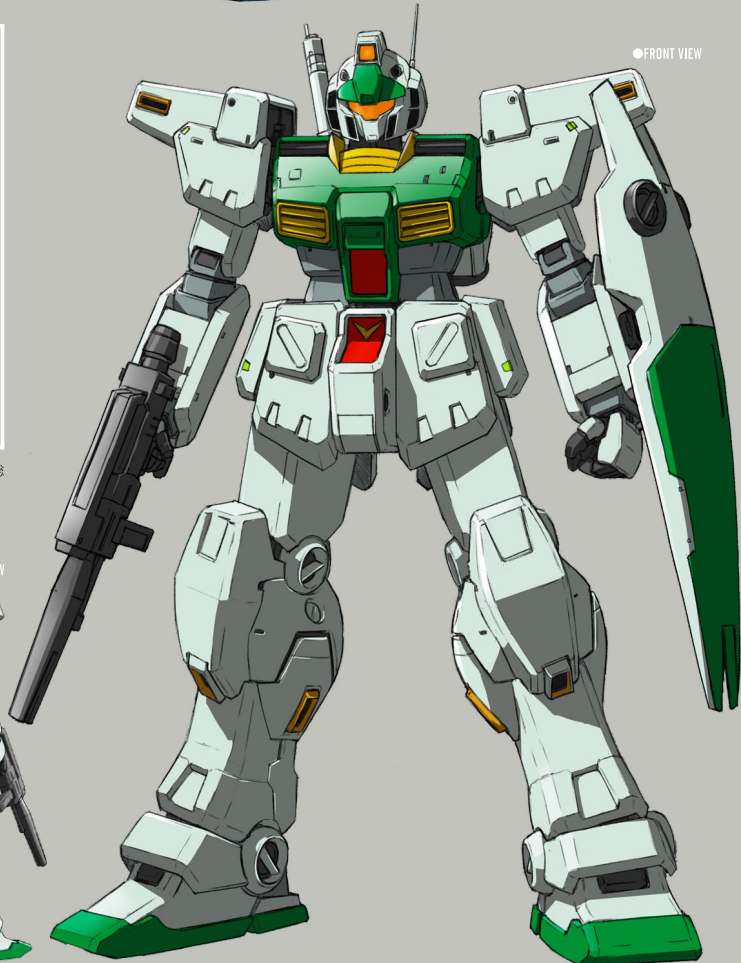
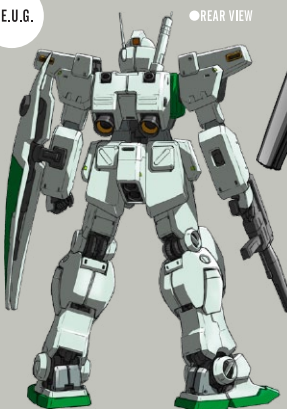
RGM-79N GM CUSTOM

[ジム・カスタム]

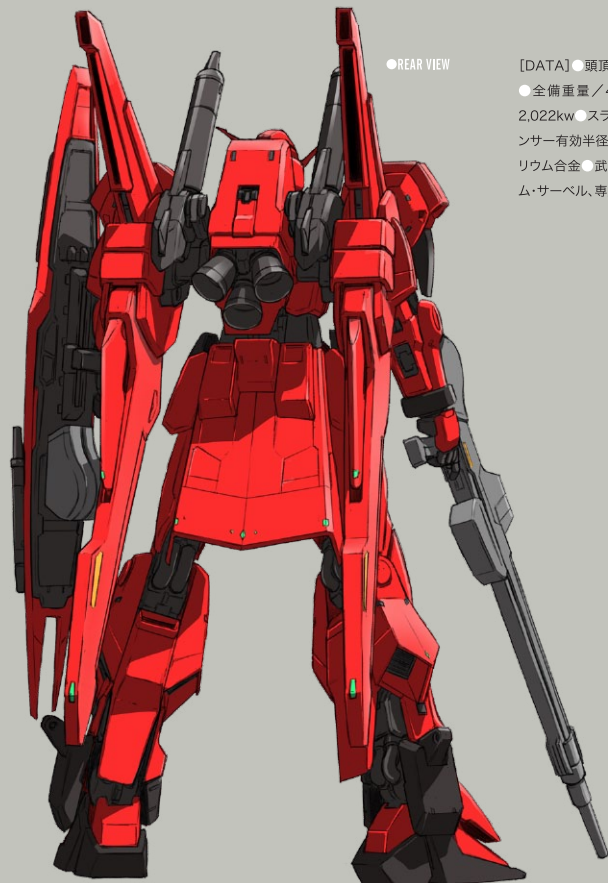
▶RGM-79ジムをエースパイロット用の高性能機として機体の向上を図った機体。機体の改良にはアレックスの開発を行ったオーガス基地が関わっている。ジェネレーター出力はガンダムタイプに並ぶレベルとなっており、スラスター推力も向上。生産コストが高いため、生産機数は少ないが基本性能が高かったため、一部機体はグリプス戦役でも使用されていた。エウゴでは歴戦のMSパイロットが好むことから指揮官機的な役割で配備されており、その際には所属識別のカラーリングとしてグリーンに塗装され、ジムII用のビーム・ライフルを装備していた。

A.E.U.G.

●REAR VIEW



●FRONT VIEW



●REAR VIEW

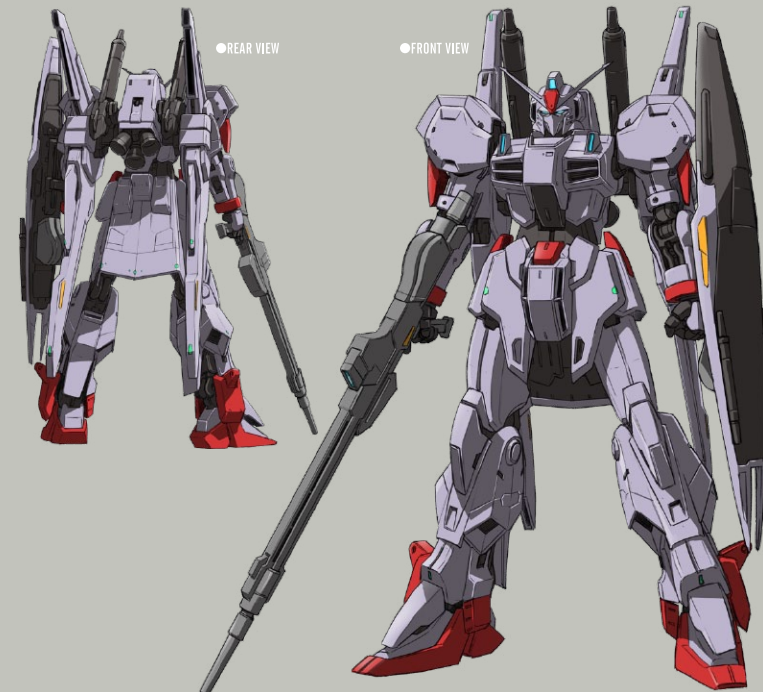
[DATA] ●頭頂高／19.5m ●本体重量／32.1t ●全備重量／48.2t ●ジェネレーター出力／2,022kw ●スラスター総推力／107,500kg ●センサー有効半径／11,500m ●装甲材質／ガンダリウム合金 ●武装／2連装ビーム・キャノン、ビーム・サーベル、専用ロングバレルビーム・ライフル

MSF-007 GUNDAM Mk-III

[ガンダムMk-III]

A.E.U.G.

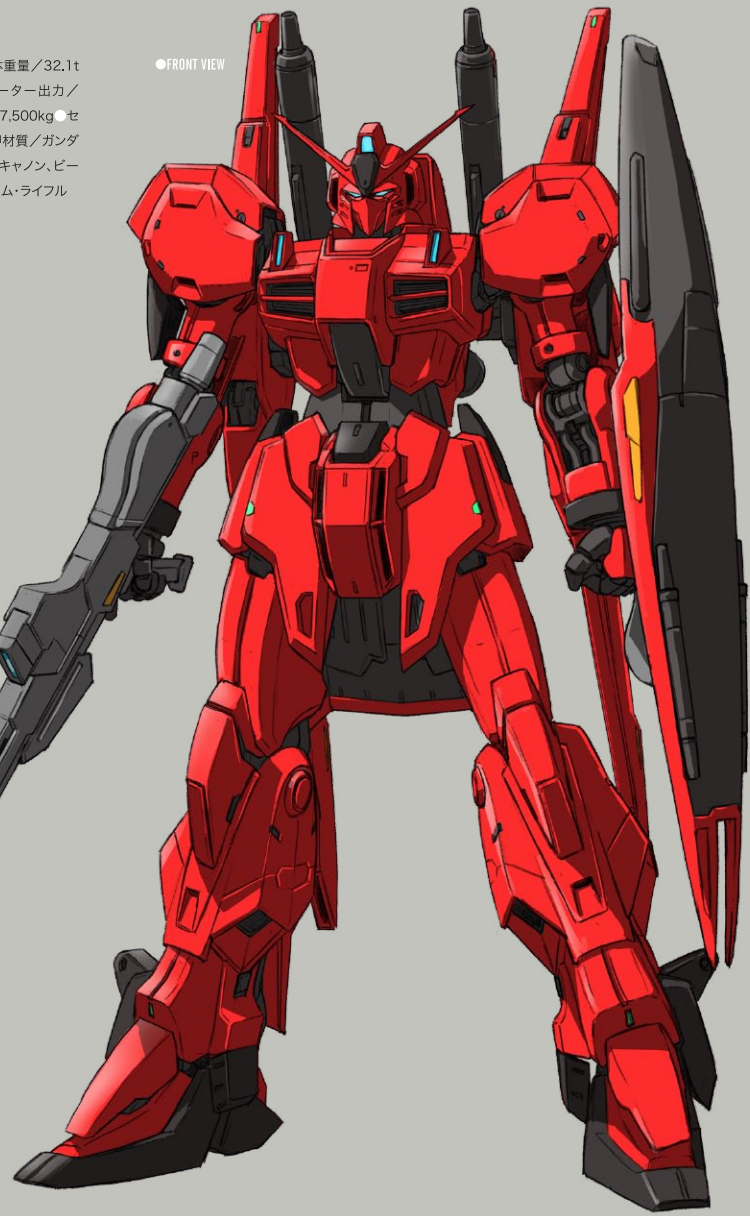
▶エウゴがティターンズから奪取したガンダムMk-IIを分解研究し、新たな技術を導入して完成した試作機。ムーバブル・フレームの構造を見直し、ガンダリウム合金を使用することで、より人体に近い有機的な動きを可能とするモビルスーツの原点回帰的な思想によって、汎用モビルスーツの進化形とも言える機体として完成する。さまざまなデータ収集を目的に、ガンダムMk-IIIは数機が生産されており、うち8号機は、MSN-00100百式に採用された耐ビーム・コーティングの廉価仕様の塗装が施されており、クワトロ・バジーナの新たな機体にするという意向のもと赤いカラーリングが施されている。



●REAR VIEW

●FRONT VIEW

●FRONT VIEW



アナハイム・ラボラトリー・ログ

〔第1話：モビルスーツ解説①〕

Mechanic Design／瀧川虚至 Kyoshi TAKIGAWA

